

巻頭言

生きがいについて

木下利彦 日本精神神経学会理事
Toshihiko Kinoshita

2019年11月に放映されたEテレ日曜美術館の「光の絵画～ハンセン病療養所・恵楓園絵画クラブ‘金陽会’」を視聴したときの感動をお伝えしたいと思います。本誌電子版にその絵を掲載していますが、ハンセン病患者 木下今朝義氏が82歳のとき（同年に「らい予防法」が廃止されました）に描いた「遠足」というタイトルの作品です。素晴らしいものだと思います。木下今朝義氏は6歳で発病し、その後10代半ばで国の強制隔離政策により国立療養所に隔離収容され、99歳で亡くなるまでその施設で過ごされました。収容時には当然のことながら国の理不尽な政策に怒り、わが身の不幸を呪い、筆舌に尽くしがたい悲しみに襲われたことは容易に想像がつきます。過酷な生涯であったにもかかわらず、晩年にこのような明るい絵を描かれたことに感動を覚えます。生涯でたった一度だけ参加した、満開の桜を見に列を作って菜の花畑を歩いた遠足の思い出を描いたものです。

この絵を見て、神谷美恵子先生の「生きがいについて」を思い出しました。ご存じの方も多いと思いますが、神谷先生の叔父さまが神父をしておられ、ハンセン病患者の慰問に付き添われた経験があり、医師になってハンセン病の治療をしたと思われたようです。しかしながら、外交官である父親に強く反対され、津田塾大学に進学されました。その後結核に罹患され結核療養所で養生し、奇跡的に回復したことから、再び医師になることを強く希望されました。20代後半にようやく両親の反対がなくなり医師になることを許され、東京女子医大に進学され、卒業後に東京大学精神科に入局されました。その後結婚しご主人の異動に伴い大阪大学精神科に入局され、1957年から岡山県の長島愛生園で念願のハンセン病患者の精神医学調査ならびに

医療を開始されました。長島愛生園での診療や1958年に京都で行われたゴッホ展を見たことがきっかけとなって、「生きがいについて」を執筆されました。

ひとが生きていくことへの深いとおしみと、たゆみない思索に支えられた名著であります。著書のなかのある患者(木下今朝義氏とは異なる)を紹介した一節を披露します。

「私どものように長期療養者は……社会復帰も職業訓練も無駄で、将来は全く絶望的である。と言っていたが、この尊い生命を粗末にしてはならない。たとえ前途に死の壁が閉ざされているにしても、この世に生まれ出て来た以上、何か証拠を残しておきたい。それには絵を描くことだと思ひ、この14年間周囲のいかなる侮辱も嘲笑も受け流して、ただ一筋に絵を描き続けて来た。私は思う、絵は楽しんで描くことである。常に自然の美を観察し絵筆を画面に思うままに塗りたくっていると、永い療養人生の旅路をふしぎに慰めてくれる。」

生きがいは厳しい状況においてこそ、強く感じる事ができるものかもしれないと驚かされるばかりです。人間が自然のなかで自然に生きること、自ら労して創造すること、自己実現の可能性などが生きがいの源泉であるようです。

PCNの表紙も2018年度からArt Brut（アール・ブリュット）になり大変好評を博しています。Art Brutとは、知的障害や精神障害の方々を中心とする芸術活動で、内的衝動性に駆られて作りあげられた芸術世界を意味します。創造する喜びに満ち溢れた作品が表紙を飾り、雑誌の品格が増しているような感覚にとらわれます。すべての精神神経学会員に芸術のもつ癒しの力の大きさを再認識していただければ幸甚に存じます。



作 者：木下 今朝義
タイトル：遠足
制 作：1996 年

材 料：油彩，キャンバス
サ イ ズ：455×530 mm
所 蔵：一般社団法人金陽会